

西成区と浪速区の被差別部落は、江戸時代には渡辺村と称していた。「村」と称しても実際は「町」で、通称「役人村」だったが、太鼓など皮革産業で栄え、幕末の頃には人口5,000人ほどの大きな集落だった。その生業(なりわい)の一つが、朝方「小便担桶(たご)」を繁華街などに設置し(いわば移動型公衆トイレ)、夕方これを回収し、翌日には農家に肥料として販売するというものだった。これがなかなかのヒット商品だったそうである。たしかに「役人村」故に、処刑など人の嫌がるような辛い仕事もあっただろうが、この小便担桶の仕事は、どう考えても「嫌がられる」仕事だったとは思えない。

中世からの被差別民の生業のひとつに「物乞い」があり、いわば「悲惨」の象徴と思い描かれるが、ちょっと一面的な気もする。渡辺村に隣住していた「非人」たちの「物乞い」の様は、現代に例えれば「募金」活動とは言えないか。事実、「非人」達は、それを果実に、障がい者やハンセン病患者などの病者を養っていたわけで、それは、時代の制約は受けているが「福祉」であり、まさに「募金」だったのではないか。周りの人々も、差別もするが、敬意もはらった、そういう「立体画面」



渡辺村と中川治さんの「宝の山」

の社会像があったのではないか。ましてや、被差別民たちが担った飢饉などでの死体の処理や人命救済は、三陸沖の自衛隊の姿とダブる。

なぜ、こんな昔話をするかと言えば、先日、旧知の中川治さん(衆院議員)は、大阪府議時代から福祉の精通者として知られていたのだが、心機一転、国土交通委員会に所属された。曰く「国交省は障がい者雇用の宝の山」だそうだ。その中川さんが、高速道路のサービスイリアなど、国交省管轄での働く場探しに奔走されている。その熱心さにボクも誘われて、いろいろ夢想したというわけだ。

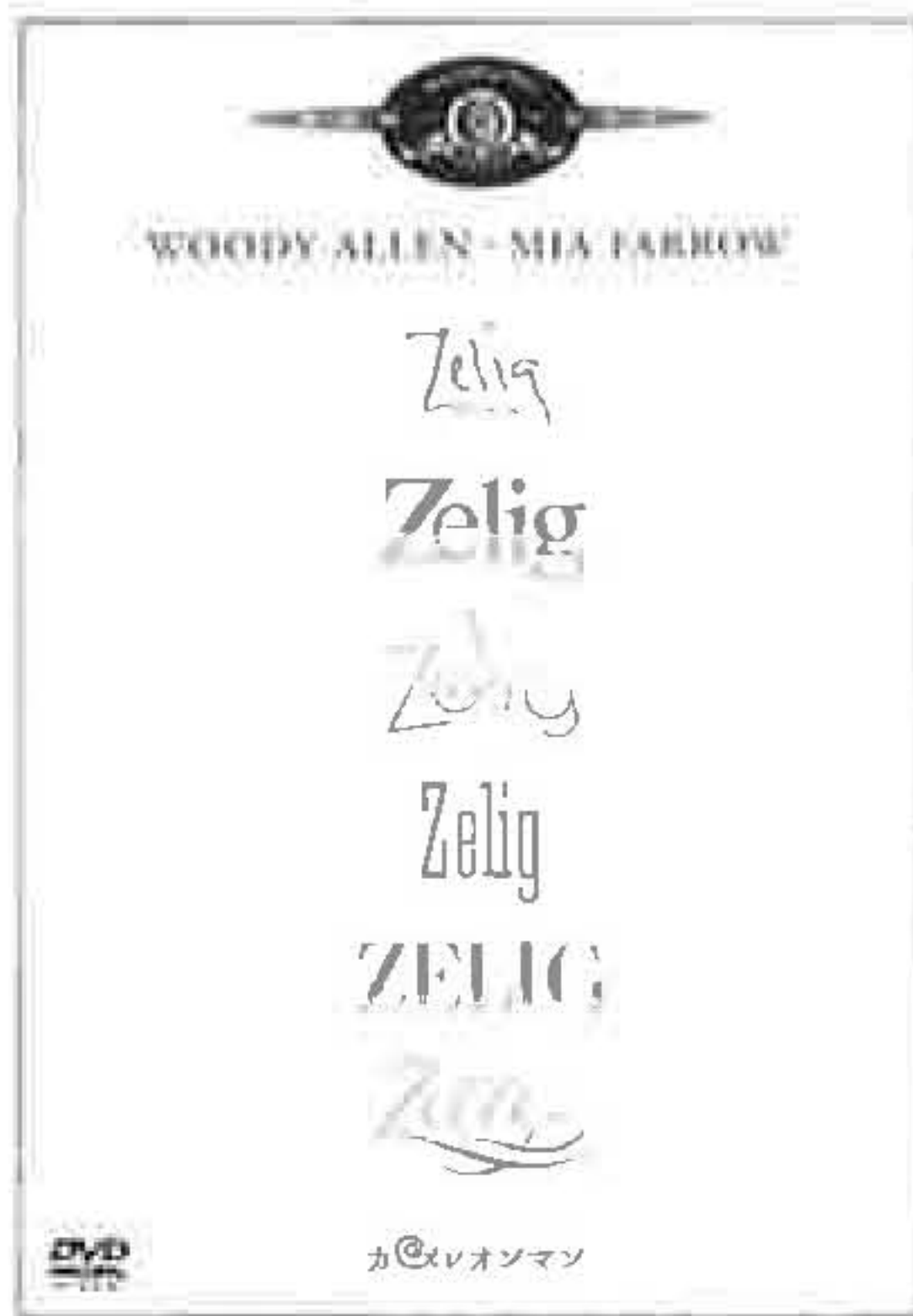
ボクは、公共の仕事の入札制度改革で、ビルメンテナンス産業を「新雇用産業」と称して、これからの成長産業、まさに「宝の山」と見ている。そうすると、遠い昔の渡辺村で生きた人々と、福祉と背中合わせに生きる現代人とが重なって見える。差別というものの原因や結果責任を追うのも大切だが、「宝の山」を開拓した先人を再評価することも忘れてはならない。中川さんの「宝の山」論には、「仕事」に「付加価値」がつくようで、思っていたより奥が深い。なるほど、「宝」は「ソーシャル・キャピタル」を思い描かせる。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸話

カメレオンマン



監督・脚本：ウディ・アレン
キャスト：ウディ・アレン
ミア・フォロー
劇場公開：1983年カラー
モノクロ80min
DVD発売元：20世紀フォックスホーム
エンターテインメント

危険から身を守る動物たちに名づけられる保護色とは、獲物を狙うために迷彩で身をやつす豹やトラなどの隠蔽色（いんぺいしょく）ともいわれ、私たちは、爬虫類であるカメレオンも周りの状況にあわせて、体色を変化させると信じてきた。しかし、カメレオンが周囲の色に合わせて自在に体色を変えるとするのは俗説だと最近知った。

1920年代のニューヨークにあらわれたゼリグという人物は、その場の状況に合わせて野球選手、ギャング、医者、東洋人などさまざまな人間に自分を変えてしまうカメレオンのような男だったという。彼はまもなく精神失調という理由で病院に収監された。しかし、大衆の間ではゼリグの変身体質の話題でもちきりになり、精神科の専門医師たちの研究対象ともなっていく。

とくにフレッチャー医師は彼に興味をいだき、ゼリグがなぜ変身してしまうのかを研究しようとする。そして、同じタイプの人間だと安心する彼の自己防衛本能から「カメレオンマン」と命名する。巷ではカメレ

オンのダンスが流行し、ゼリグのキャラクター商品が大好評。下着やレコード、エプロン、玩具までがバカ売れする。映画にもなり、当時の大統領や歌手ら有名人と歓談した彼のニュースフィルムが挿入される。この頃、黒人にも変身してしまうゼリグにKKKは脅威をいだき、労働組合は彼を資本主義の権化だと嫌悪する。しかしゼリグは失踪し、その後大衆は彼に興味を失っていく。

この映画の原題は「ゼリグ」である。サイレント・モノクロフィルムで当時の彼の状況を解説し、ゼリグの存在を現在の視点から、学者スーザン・ソンドック、作家のソール・ベローら著名人がゼリグの精神性をコメントする場面はカラードキュメンタリー仕立てになっている。が、これはウディ・アレンがまことしやかに大ボラを吹かし、ペテンの極めつけを作品にした贗作ドキュメンタリー映画なのだ。チャプリンやベブルース、果てはヒトラーの側近として現れるゼリグ（W・アレン）は、古いサイレント映像にアレンをうまくはめ込み、不自然さを感じさせないほど特殊撮影をうまく利用している。

ナチの全体主義の中に自分の居場所を求めたゼリグではあったが、博士（M・フォーロー）の尽力によって見事大西洋横断を果たしナチから逃亡、ニューヨークで「勇猛賞」を受けて熱狂的群集の中をパレードする。博士は、最初自らの名声のみの研究だったが、ゼリグを愛し正式に結婚をする。博士が彼をひとりの人間に変えたのだった。

それにしても、W・アレンは著名人まで共犯に巻き込み、よくもこんな嘘八百を描いたものである。チャールストン・エイジの雰囲気味わえる実験的映像であった。

hidarimaki

